

小論文

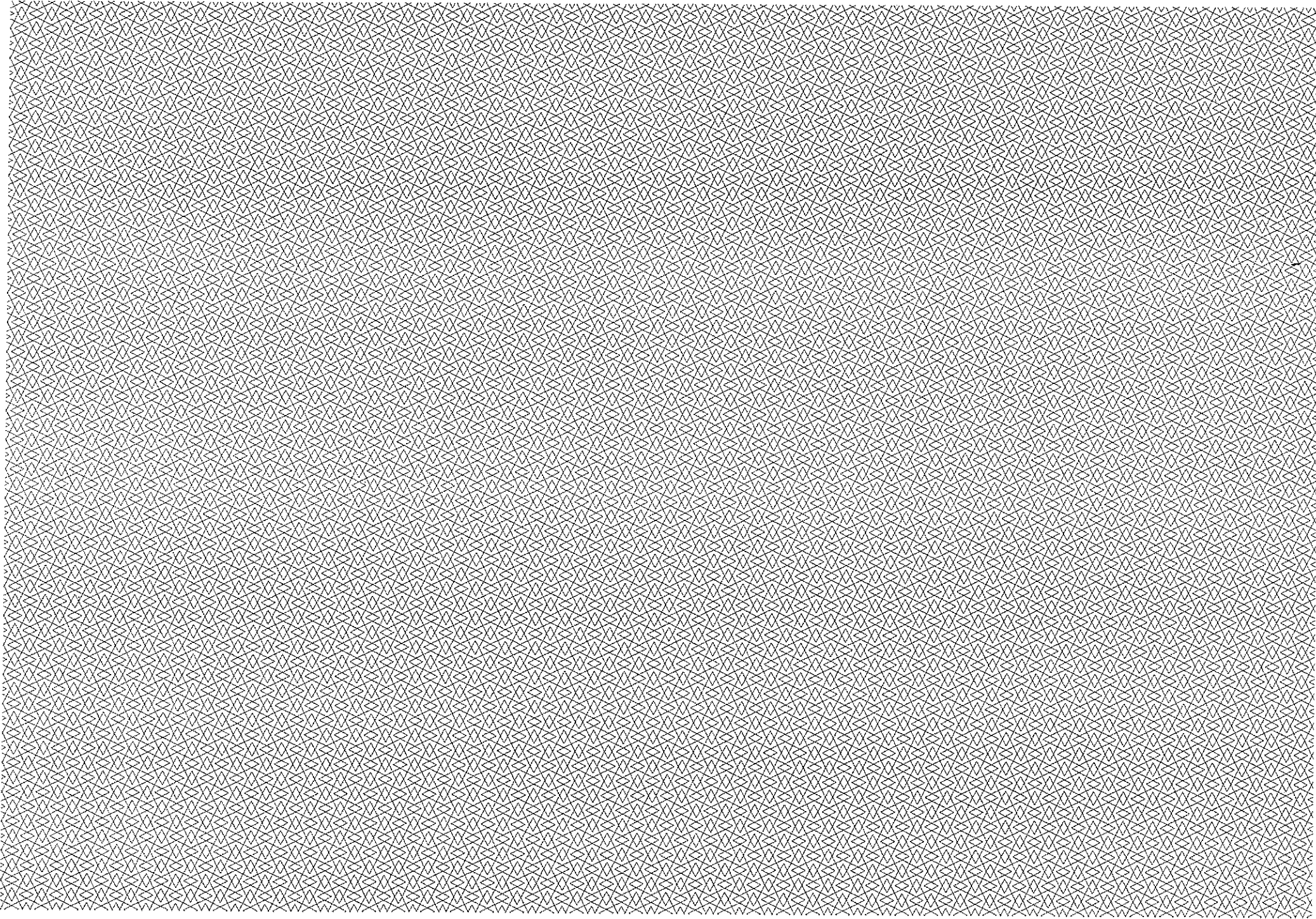
(問題)

2013年度

〈2013 H25079020〉

注意事項

- 1 問題冊子および解答用紙は、試験開始の合図があるまで開かないこと。
- 2 問題は3ページに記載されている。
- 3 解答はすべて解答用紙の所定の欄に、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。解答用紙の余白および枠外への記入はすべて禁ずる。
- 4 受験番号および氏名は解答用紙の所定の欄だけに記入し、所定の欄以外に受験番号および氏名を記入してはならない。
- 5 問題冊子および下書き用紙は持ち帰ること。



Aは、一九七〇年代に書かれた文章である。Bは、二〇〇〇年代に書かれた文章である。

この間の国際情勢の変化を踏まえ、スポーツの功罪両面に触れつつ、これからの人類社会にスポーツが持つ意味について考えるところを八〇一字以上一〇〇〇字以内で述べなさい。

A

いったい、それではなぜ、一九世紀にいたって「スポーツ」という文化要素があらわれたのであろうか。たいへん突飛な発想にきこえるかもしれないが、わたしは、戦争と平和の問題がからまりあっているような気がしてならないのである。相手をひっつかいたり、なぐったり、という部族間戦争は、鉄砲の登場にはじまる近代兵器の発展によって、大量殺人の段階にはいった。第一次世界大戦という今世紀はじめの大戦は、現代の戦争というものがどれだけひどいものであるかを実証してくれた。戦争をやめましょう、という気分ないし思潮があらわになってきたのである。

(中略)

そのようなファシズムの時代のなかで、たとえば中井正一のようなリベラルな思想家が「スポーツ気分の研究」といったスポーツ論を本格的に展開していたのは、きわめて興味ある思想史的問題を投げかける。文化要素としての「スポーツ」は、きわめて複雑な論理の糸で、直接的な暴力回避の思想とつながっているかのようにおもえるのだ。

じつさい、「スポーツ」というものは、闘争欲をよりシンボリックにつくりかえた文化的構築物なのであろう。国際緊張が高まればその緊張をゆるめる努力のひとつとして「スポーツ」がかなり重要な役割を果たす。国際オリンピック連盟の設立が一八九四年、第一回近代オリンピックが一九〇六年、といった年表を眺めてみても、それが、いわゆる「世紀末」の不安の時代とかさなりあっていることにわたしなどは興味をもたないわけにはゆかない。

さいきんの例をみてもそうだ。正式に国交関係のない国のあいだでも「スポーツ」による交流はかなり自由におこなわれる傾向にある。米中国交の回復にあたって、まずピンポン使節団が水先案内の役目を果たし、それにつづいてニクソン訪中が実現したことなどはそのめざましい一例だし、日本と、外交上複雑な関係にあるいくつかの相手国に關しても、スポーツで交流がおこなわれている事例は枚挙にいとまがない。こうした問題は、「スポーツ」というもののもつ、きわめて重要な意味を示唆する。国際関係論という学問があつて、多くの学者が国際間の緊張や交流を研究しているが、ほんとうは、この「スポーツ」という文化要素に着目した国際関係論がこれから真剣にかんがえられてもいいのではないか、とわたしなどはおもうのだ。

B

スポーツにおけるナショナリズムの發揮は、実際の戦争や紛争の場で生じる物理的な暴力を回避すべく、スポーツ競技というルールに基づいたうえで、人びとが抱く闘争への欲求を「文明的」に充たしていると解釈される。つまり、文明化という視点から見ると、自国チームを応援し代表選手の活躍に声援を送ることで成り立つ集合的な熱狂や興奮は、戦争における「野蛮な」暴力とは対照的に、より洗練された「文明的な」ナショナリズムの形態にはかならないのである。

もしこのように、スポーツの場におけるナショナリズムの發現が「文明化」のプロセスとしてのみ理解できるならば、それを危惧する必要はないだろう。なぜならそれは、暴力とは無縁な「健全な」ナショナリズムとして容認され得るからだ。だが、スポーツとナショナリズムを取り巻く現実には、そうした樂觀的な認識を許すほど単純なものではない。

たしかに、ある面でスポーツを介して發揮されるナショナリズムは、洗練された文明的なものかもしれない。戦争や紛争における暴力や殺し合いとは異なり、スポーツにおけるナショナリズムによつて死者や怪我人が大量に発生することとは、現在ではまず考えられないだろう。だが他方で、スポーツを通じたナショナリズムの高まりが、たとえ間接的であれ、現実世界での紛争や戦争を煽り激化させることは、事実としてあるように思われる。

スポーツという正当化された手段を用いて味方・自分たち／敵・奴らとが峻別されることで、相手との対立感情が激化していく。その結果、社会における紛争がますます深刻化する。こうした悪循環が生じる危険性は、「スポーツによる友好」とのスローガンとは裏腹にさまざまな軋轢や矛盾に満ちた国際政治のなかにスポーツが置かれている現実を考えれば、不可避なことかもしれない。このように考えると、スポーツにおけるナショナリズムの發現は「文明化」のプロセスであると同時に、「野蛮化」に結び付く危うさを常に持ち合わせていることが明らかになる。

